

東北応援ツアーに参加し東北を思う

浅井 正治（文：97年卒）

わたしは、名古屋市在住ですが今は1週間のうち5日間を東北で支援を続ける生活を送っています。大震災の翌年から福島県会津地方の中学校と岩手県大船渡市の小中学校を訪問してスクールカウンセラーとして勤務しています。

岩手県の大船渡市は、大きな津波被害にあった所で被災して親や祖父母や親せきを失った子どもたちも沢山います。また、保護者の方も家屋だけでなく職も失ってしまった人も多く、日常ストレスが増大、家族関係もぎくしゃくすることがあり、それが子どもたちの大なり小なり影響していることは否めません。

一方、福島県は直接被災した地域ではなく会津地方に勤務しています。被災時につらい思いをされた先生方もいますが、子どもたちは大きな被害を受けた子どもたちはいない地域です。日々の勤めの中で福島県は、被災状況を自分の眼で見る機会に恵まれていませんでした。今回、立命館校友会の東北応援ツアーに参加することができ、なかなか踏み込めない地域や被災当事者の方々の話を直接聞く機会をいただけたことは私にとっては大きな財産となりました。

私自身は、東北地域とはこれまであまり縁がある地域ではありませんでした。東北大震災を機に現地に赴くことになりました。岩手県は、震災から月日が流れ更地しかなかった土地には、建物が立ち盛り土がなされてかさ上げ工事も進んでいます。一方、福島県の原因近隣は、時間が止まってしまったかのように、復興が目に見える形で進んでいるようではありませんでした。浪江町では地震によるビルや家屋などの倒壊したままの残骸、津波によりすべてを飲み尽くされて基礎のみを残している建物跡など生々しい状態で残されていました。警備車両は目にするものの一般の市民の皆さんの姿をあまりみかけることができませんでした。

被災3県が実施された心の問題に関するチェックリストでも、圧倒的に福島県の不調が目立っています。「岩手・宮城は、震災は過去のこととして市民も受け入れているが、福島は原発のことがあり現在進行形なところが大きな問題」と岩手のスーパーヴァイザーの先生からコメントしていますが、まさにその状況でした。

このような厳しい状況下でありながら、私たちがお会いした被災者の方々はどなたも前を向いている姿に自分自身の使命とは何かと改めて考えさせられました。

国からの特別予算も徐々にカットされ、震災が過去の事とされようとしています。しかし、福島をはじめ被災県の人々は、まだまだ厳しい現状の中で今を生きようとされています。私自身、この後どのくらいの年数を支援できるかは不透明な状態です。それでも、「自分の後半生を形を変えても何らかの形で携わっていこう」という決意を固めることができたツアーでした。

最後に、福島状況を語りながらガイドして頂いた福島県校友会の方々に紙面を借りま

して感謝の意を示したいと思います。本当に、ありがとうございました。